

福祉現場の今を読み解く

第2回 親の自立・子の自立



佛敎大学
田中智子

たなか ともこ/専門
は障害者家族に生じる
生活問題、ケアに関する
理論的考察。著書に
『障害者家族の老いる
権利』（全研出版部）
など。



どうして自立が遅くなる？

今回は、親の自立・子の自立について考えていきたいと思っています。

現在の障害者家族における親の自立・子の自立のタイミングについては、総じて遅すぎると思います。もちろん個々の家族が、いつ、どのような形で自立を迎えるかということについては、個人や家族の判断によるべきだと思います。しかしながら、私が現場でうかがう話のなかで最近、気になるのは、親がケアがむずかしくなった後、とても落ち込んでしまっている様子とは大きくちがう様子になる方、なかには特に元々、疾患等はなかったのになんとなく親を追うよう

に命を縮めてしまおう方がおられるということ。このような話を聞くたびに、

親子の距離が近すぎて、親が関われなくなった後の当事者の生活の確立がむずかしくなったのではないかと思います。親の老いや看取りを乗り越えるためには、それまでに親に依存しない当事者の生活圏や社会的関係を確立することの必要性を感じます。

なぜ障害者家族における親の自立・子どもの自立は遅くなるのか？ 今回は、その社会的背景を考えていきたいと思っています。

暮らしの場の問題 深刻な量的不足

第一に、暮らしの場（入所施設、グル

ープホームにより社会資源や制度に格差があり、暮らしの場へのアクセスの可否が異なるのも問題です。

子どもが親元から離れて新しい生活を築いていく暮らしの場の移行という決断に至るまでには、家族は逡巡を繰り返して、大きな決断をされることと思います。それなのに、適切な暮らしの場が無いという事は、自立のタイミングを逃してしまいう大きな要因となると思います。

暮らしの場の市場化による逆選択

第二に、現在の暮らしの場、特にグループホームにおいては、営利を目的とした民間企業が多く参入しています。そのことが一概に悪いとは言えませんが、なかには、支援が困難という判断を事業者側の都合だけでおこない、一方的に退所を迫られるケースも耳にするようになり

ました。

「暮らしをつくる」というのは、一人ひとりの多様性を尊重するからこそ、障害者本人も支援者も手探りで長い時間をかけておこなわれるものだと思います。それを可能とするのは、職員が継続的に働ける労働環境やなにより事業者が「障害のある人の生活や人権を守る」という

社会的使命が必要だと思っています。それが十分でない事業者において、支援マニュアルに沿わないから、あるいは一度問題を起こしたらとそれを振り返ることなしに退所を迫るといった事業者の都合によって、障害のある人や家族が翻弄される逆選択が起こっていると思います。

また、市場化による問題のもう一つの側面として、暮らしの場の利用者負担の増大も気がかりなところ。自治体による補助が十分でない地域では、障害のある人の収入を上回る本人負担が生じることも多くあります。そのような地域では、家族が経済的に支援できるうちはグループホームを利用できるけれど、それがむずかしくなったら退所しなければならぬという家族の不安の声を聞いたこともあります。経済面も含め、家族に依存しない暮らしの場のあり様が求められます。

ケアラー役割終了後の親の人生の再構築

第三に、遅すぎる自立問題は、親のライフサイクルにも影響を与えます。一般に子どもが自立していく時期は、子育てがひと段落したという実感を伴いつつ、

ープホーム、一人暮らし）が量的に絶対的に不足しているからです。障害者本人や家族が、そろそろ自立を試みたいと思ったりしても、現在、暮らしの場は圧倒的に不足しており、希望するような生活、支援ニーズに応じた暮らしの場を、タイミング良く見つけることは非常に困難です。現在、国は「地域」での生活を促すために、原則新たに入所施設を作らない方針ですが、入所施設にかわる地域生活と言ってもグループホームや一人暮らしを支える資源も非常に乏しいです。特に、行動障害や医療的なケアなど濃密な支援が必要な人ほどむずかしい状況にあります。また地域間格差の問題も明らかにする必要があります。

親の人生や夫婦関係の再構築という営みがなされる時期です。しかし、障害者の親は依然としてケアラー役割を担い続けなければなりません。親自身にとつても、自分の子育てがひと段落した後という見通しがもてない場合、ケアラー役割を誰かに委ねるといったイメージはむずかしいものだと思います。

ときどき、「親離れよりも子離れの方がむずかしい」という言葉を聞くことがあります。それは年齢的に考えてもその通りだと思います。遅すぎる子離れは、親自身に、ケアラー役割を終えた後のちがう人生を思い描くことをむずかしくさせます。

現場で出会う当事者・ご家族の姿を、このような社会的背景とともに理解するのが重要だと思います。「親離れできない子」「子離れできない親」と時にはもどかしく思われる場面もあるかもしれません。しかしながら、その現実を本人たちの自己選択の結果という狭い理解をしてしまうと、そのようにしか生きる選択肢を与えなかった社会の責任は放棄されてしまいます。

次回から、社会資源の側の状況について考えていきたいと思っています。